

36. 守山市金ヶ森西遺跡出土の有孔円板について

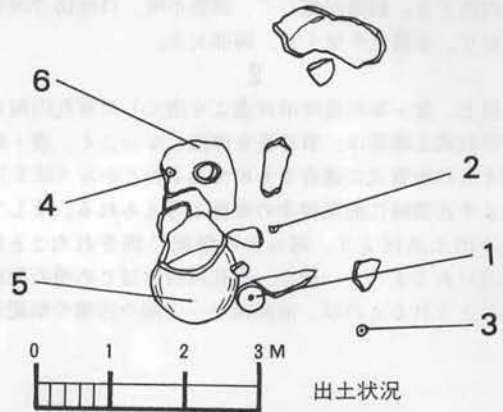
本遺跡は、守山市の南、草津市との境界近く、金ヶ森集落の西一帯に所在し、古墳時代から奈良時代にかけての集落跡として周知されている。そして、近年、水田中より壺に入った小型珠文鏡が出土し、「祭祀遺跡」としても注目されていた(注1)。ところが、今回、中南部流域下水道工事に先立って、その一部を試掘調査したところ、古式土師器に伴って、大小4点の滑石製有孔円板が出土し、改めて本遺跡の重要性が確認された。

1

4点の有孔円板は、調査区のはほぼ中央N T-2 Cトレンチで検出した東西に流れる溝状遺構の肩口で、多数の古式土師器と混在した状態で出土したものであり、溝下層には砂層が厚く堆積し、旧河道と考えられる。次に、その概要を記すことにする。

(1) **有孔円板①** 径3.25cm 厚さ0.35cmをはかり、ほぼ中央に径0.35cmの円孔を穿つ。やや大型の単孔円板である。表裏および側面を数方向より研磨し、円孔は、単一方向より穿たれている。

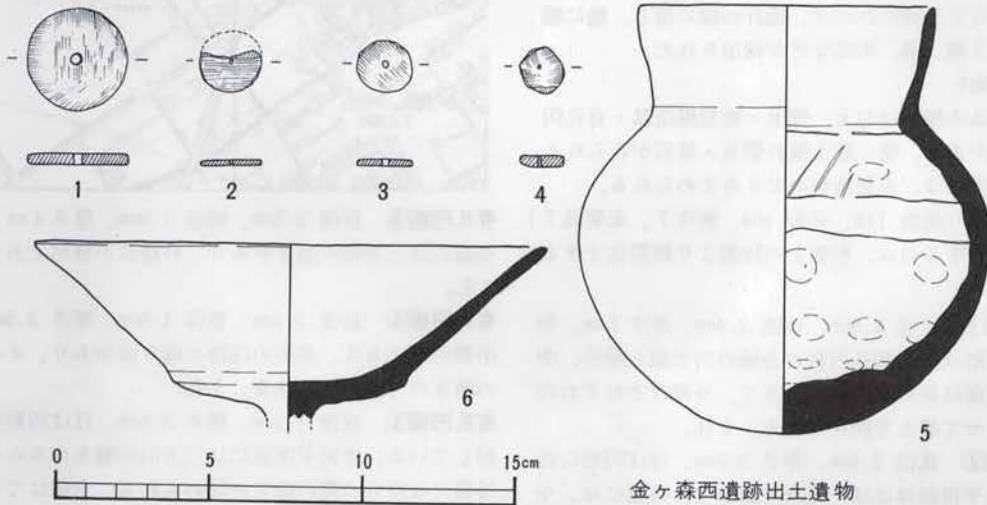
(2) **有孔円板②** 径2.0cm、厚さ0.19cmをはかり、ほ



ぼ中央に径0.15cmの円孔を穿つ小型の単孔円板である。3分の1が欠失しており、研磨は、ほぼ一定方向からなされている。

(3) **有孔円板③** 径1.8cm、厚さ0.21cmをはかり、中央よりやや外によせて径0.22cmの円孔を穿つ小型の単孔円板である。部分的に欠失しているがほぼ完形で、研磨もほぼ一定方向からなされている。

(4) **有孔円板④** 径1.5cm 厚さ0.38cmをはかり、中央よりやや外によせて径0.12cmの円孔を穿つ小型の単孔円板である。やや厚手で3分の1弱が欠失してい



る。数方向から研磨され、円孔はきわめて小さい。

(5) 小型丸底壺 口縁部はゆるやかに内湾して上方にのび、体部はやや球形で丸底を呈する。口径 9.6cm 器高 13.9cm をはかり、内面に指押え痕が残る。表面の剥落が激しく調整は不明。口縁内外は、ナデか。淡褐色。

(6) 高坏 坏部口縁は直線的に外反し、坏底部はやや内湾する。剥落が激しく、調整不明。口径 16.7cm をはかり、赤褐色を呈する。脚部欠失。

2

以上、金ヶ森西遺跡旧河道より出土した有孔円板および古式土師器は、須恵器を伴出しないこと、壺・高坏ともに布留式に通有なものであることから(注2)、およそ古墳時代前期後半の所産と考えられる。そして、その出土状況より、何らかの祭祀に供されたことは間違いあるまい。一般に、有孔円板をはじめ滑石製模造品とされるものは、前期後半～中期の古墳や祭祀遺

跡より多数出土するものであり(注3)、本遺跡の場合も、さきに発見をみた小型珠文鏡の出土地点が、今回出土した水路の上流に当たる点などからして、この水路(旧河道)をめぐるなされた「まつり」の一形態である可能性は大きいと考える。そして、有孔円板が鏡を模したとする通説によるなら、それはまさに、水と鏡をめぐる祭祀と言えるであろう。

(注1) 山崎秀二『守山市遺跡分布調査報告書』(『守山市文化財調査報告』第2冊、守山市教育委員会、1977)

(注2) 大和飛鳥地域出土資料によれば、上ノ井手遺跡井戸下層出土例に類品が認められる。〈安達厚三・木下正史「飛鳥地域出土の古式土師器」(『考古学雑誌』60-2、1974)〉

(注3) 小出義治「祭祀」(『日本の考古学』V・古墳時代、下、1956)ほか

(大橋信弥)

37. 守山市播磨田東遺跡の 玉作工房址とその遺物

昭和52年10月から翌年4月まで、守山市教育委員会が調査した播磨田東遺跡では、弥生時代中期後半から古墳時代中期にかけての竪穴式住居址群が検出され、その出土遺物の一部については本シリーズ第7号で報告した。ここでは、古墳時代中期の玉作工房址とその遺物を紹介したい。

〈立地と経過と概略〉

遺跡は野洲川沖積地の中央、野洲川旧分流の一つ江西川左岸微高地に立地する。調査は民間の宅地造成に先立つもので、検出された竪穴式住居址は円形・方形・長方形など多種にわたり、総計49棟に達し、他に掘立柱建物5棟、溝、土壇などが検出された。

〈出土遺物〉

滑石製品の種類は勾玉・管玉・剣型模造品・有孔円板・白玉があり、他に碧玉製の管玉・原石がみられる。なお、前者には、未製品がかなりみとめられる。

有孔円板(総数 118、完形 104、断片7、未製品7) ここで報告するのは、形態上の特徴より類型化できるものである。

有孔円板① 長径 2.9cm、短径 2.4cm、厚さ 7mm、形態は四辺形状で、有孔円板の各種の内でも最も厚手。中央の平坦面は斜め一方向の磨きで、外周はそれぞれの面にあわせて磨き方向がかわる。1孔。

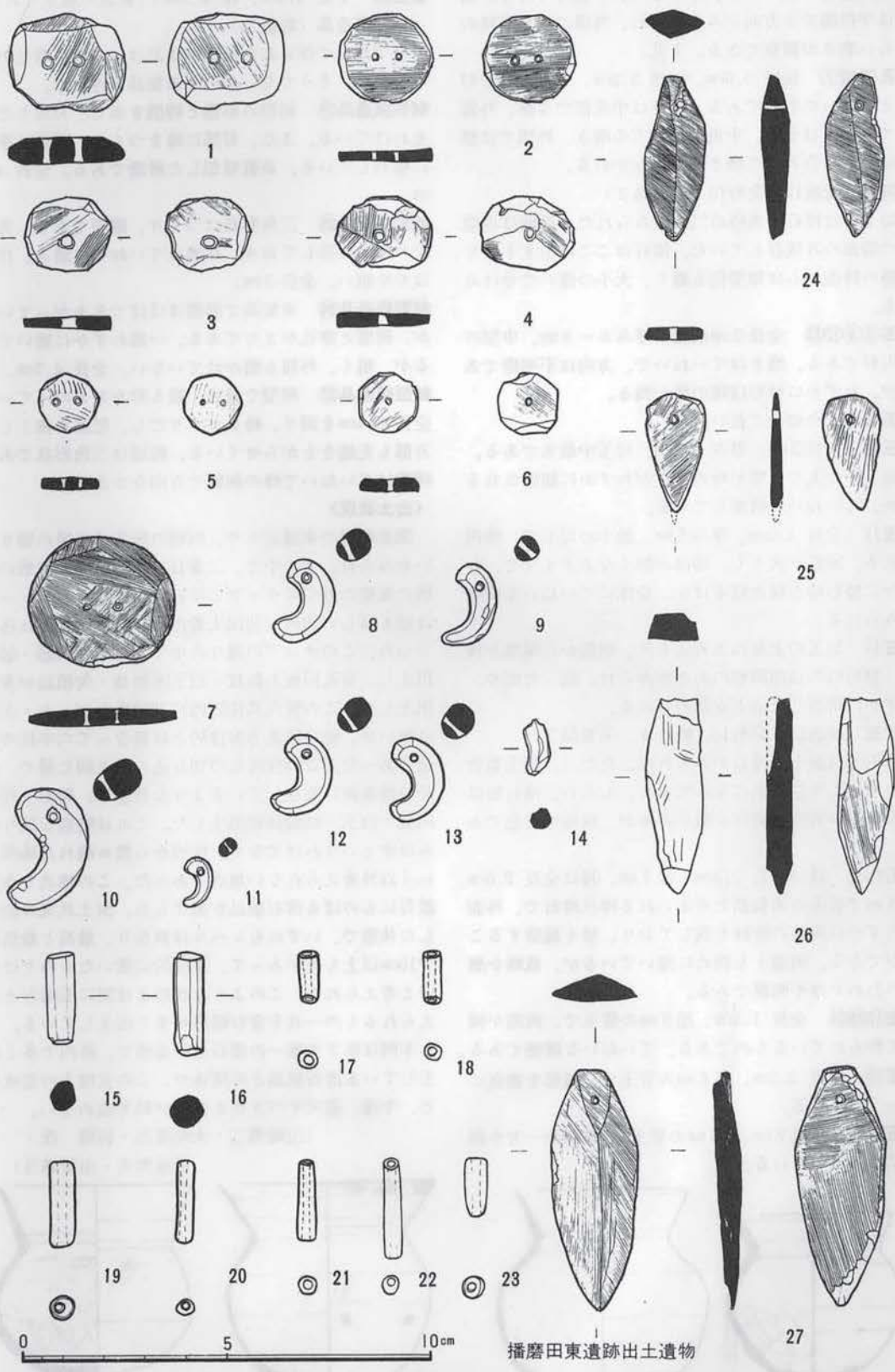
有孔円板② 直径 2.4cm、厚さ 3.5mm、ほぼ円形に近い。中央平坦面はほぼ一方向の磨きで、外周には、やはり形態をととのえる際の磨きの痕跡がのこる。2孔。



有孔円板③ 長径 2.5cm、短径 1.9cm、厚さ 4mm、中央部には三方向の磨きがあり、外周は不整形である。1孔。

有孔円板④ 長径 2.4cm、短径 1.8cm、厚さ 3.5mm、不整形である。整形の段階の残り面があり、その際の磨きの方向が多く残る。1孔。

有孔円板⑤ 直径 1.5cm、厚さ 3.5cm、ほぼ円形に整形している。中央平坦面には二方向の磨きがみられ、外周には整形の際の磨きが認められる。全体にていねいに仕上げる。2孔。



播磨田東遺跡出土遺物

有孔円板⑥ 径 1.5cm、厚さ 3mm、不整形である。磨きは平坦面で2方向がみとめられ、外周には整形時のあらい磨きが観察できる。1孔。

有孔円板⑦ 長径 3.6cm、短径 3.2cm、最も大型で形のととのった形態である。厚さは中央部で5mm、外周部で2mmをはかる。中央部は三方の磨き、外周では整形時の形に合わせて磨きの方向がかわる。

勾玉 (総数12 完形10 未製品2)

勾玉には滑石・馬瑙の二種がみられた。馬瑙は赤澄色で頭部のみ残存していた。滑石はここに示すとおり、形態の特徴からは類型化も難く、大小の違いで分けられる。

勾玉⑧⑨⑫⑬ 全長 2cm前後、厚み 8~9mm、中型の楕円形である。磨きははいねいで、方向は不明瞭であるが、わずかに整形段階の稜が残る。

勾玉⑨ やや細身で長い。

勾玉⑩ 全長 3cm、厚み 1.1cm、勾玉中最大である。断面もやや丸く、整形時の磨きがわずかに観察されるほか、はいねいで研磨している。

勾玉⑪ 全長 1.2cm、厚み 5mm、最小の勾玉で、楕円である。頭部が大きく、尾部が細くなるタイプで、わずかに整形時の稜が残るほか、全体にはいねいな研磨がみられる。

勾玉⑭ 勾玉の未製品と考えられ、胴部から尾部が残る。整形時の細部調整のあとがみられ、割った面や、わずかに研磨したあとが認められる。

管玉 (総数17、完形10、断片4、未製品3)

管玉では碧玉と滑石がみられた。ただし、碧玉製管玉も風化して白灰色になっており、もろい。滑石製品も未製品が数点、断片が数点あるが、淡緑灰青色である。

管玉⑮⑯ ⑮は全長 2.3cm 径 7mm、⑯は全長 2.6cm、径 8mmで管玉の未製品と考えられる棒状滑石で、外面はわずかに角柱の痕跡を残しており、稜を観察することができる。両端とも斜めに傾いているが、裁断か磨きのためかは不明瞭である。

管玉⑰⑱⑳ 全長 1.4cm、径 5mmの管玉で、両端が傾いて作られているものである。はいねいな研磨である。

管玉⑲ 全長 2.2cm、径 6mmの管玉で、端部を垂直にカットしている。

管玉㉑ 全長 2cm、径 5mmの管玉で、端部の一方を斜めにカットしている。

管玉㉒ 全長 2.5cm、径 4.5mmで、最長の管玉である。

剣型模造品 (総数18)

全て滑石で作られた剣型模造品は、一応、有孔のものを製品、そうでないものを未製品と考えた。

剣型模造品㉓ 剣型の形態と特徴を示し、刃部と把部をわけている。また、刃部に峰をつくり、断面を菱形に整形している。表裏類似した研磨である。全長 4.1cm。

剣型模造品㉔ 三角形状につくり、扁平である。先端がわずかに欠損しており、片面ははいねいで磨き、片面はやや粗い。全長 3cm。

剣型模造品㉕ 未製品で形態はほぼできあがっているが、研磨と穿孔がまだである。一部わずかに磨いているが、粗く、外周も磨かれていない。全長 4.7cm。

剣型模造品㉖ 剣型で最大。最も形がととのっている。全長 5.4cmを測り、峰をつくりだし、把部を細くし、刃部も先端をとがらせている。断面は三角形状である。研磨ははいねいで峰の両側で方向をかえる。

〈出土状況〉

調査範囲の東端近くで、四棟の竪穴式住居の切り合いがみられ、その中で、二番目に新しい隅丸方形の住居の東壁の近くにチップと原石が集中しており、一部は最も新しい住居(別図土器出土)の中にも流れ込んでいた。このチップの塊りの中で管玉未製品⑮・⑯が出土し、有孔円板も数枚・白玉未製品・欠損品が多数出土した。この竪穴式住居内には特殊なビット・土扱は無いが、他の隅丸方形住居とは異なって六本柱の構造であった。この住居址の切り込み面と同じ層で、当時の地表面に散在しているような状態で、勾玉・有孔円板・白玉・鉄製品が出土した。これは特別な掘り込みの中というわけではなく、住居から数m離れた場所という以外考えられない地点であった。この地点で合計数百にもものぼる滑石製品が出土した。出土状況は散在した状態で、いずれもレベルは異なり、最高と最低位で10cm以上も差があって、意図的に置いたものではないと考えられた。このような状態とは別に玉砥石と考えられるもの一点を含む砥石が多く出土している。

本例は県下で唯一の滑石玉作遺構で、県内で多く出土している滑石製品との関係や、この立地上の意味など、今後、追究すべき点も多いが稿を改めたい。

(山崎秀二・大崎隆志・岩崎 茂・

中原秀夫・山田謙吾)

